

石井順二先生招聘那覇学び一步の会セミナー

那覇市金城小において那覇学び一步の会の自主研究会が開催された。参加者は約60名、東海国語学びの会顧問の石井順治先生を招聘しての研究会である。石井先生以外にも東海国語学びの会から10名余の参加者があった。



那覇市でも初鹿野先生が27年度3月に金城小で教職を退職なされて後、一步の会のメンバーや後継者たちがその思いや理念を引き継ごうと頑張っている。

本日は、金城小のY先生の授業ビデオと、浦添市の牧港小学校のI先生の授業ビデオを参加者で視聴し省察する、ビデオアクションリサーチのスタイルでの勉強会となった。授業ビデオ提供者の二人にまずは心より感謝申し上げたい。

- 【授業①】 浦添市立牧港小学校 I先生
 4年 国語 : 分かったことを説明しよう。「花を見つける手がかり」 《説明文》
 本時の目標: 問と答えを見つけ、その答えの根拠を説明する。

【ビデオ視聴】

《授業デザイン》



1. 教材と自分の体験を結びつける(グループでスタート)
 モンシロチョウの写真から思ったことを交流する
2. 「問い」に対する「答え」について話し合う
 「モンシロチョウは何を手がかりに花を見つけるか」話し合う
3. 音読し「答え」の根拠について話し合う 全文音読(グループ)
 根拠の整理(グループ) ⇒ ノートまとめ
 ⇒ 全体で「答え」答えの根拠について交流する(コの字型)
4. 自分の考えを整理する。

【授業者より】 文学教材を扱った単元「白いぼうし」では、「聴くこと」「分からなかったら友だちに訊くこと」を意識して学び合う授業に挑戦することができた。学び合いを始めて一ヶ月の子ども達、まだ学びに対する作法が身についておらず、友達の発言を聴くことができない児童が多いが、意識できる子どもも少しずつ増えてきている。



左写真、授業者の説明、牧港小では校内研ではなく、数名のグループ研の形で「学び合う授業づくり」に挑戦している。校内の壁を越えて一步の研究会への参加自体が素晴らしいことであるが、授業ビデオの提供にも頭が下がる思いである。



右写真、無作為に形成されたグループで授業ビデオの省察と先生方の日常における

授業づくりの「困り感」や「工夫やアイデア」を交流する。素晴らしい笑顔で、なんの縛りもなく互いに訊き合い、相手の困り感に真摯に寄り添い、貴重な時間が参加者自分たちの手で作られられていく。

《石井先生より》

[大切にしていること3] 私の理念

- ① すべての子どもの学びを保証する。
- ② 探究型・・・子ども達が見つけていく。
- ③ 子どもの関係をつくる。仲間とつながり合える。



[ビデオを見る視点]

すべての子どもの学びをみる。つまずきを見る、表情・仕草をみる。
 子どもの分からなさを見る。こどものつながりを見る。
 子どもが探究しているか(発見しているか?対話に学びがあるか。)



[今日の授業について]

- ▲ 発言に偏りがある。一人ひとりの子がいきる授業になっているか。11名の発言。21名発言なし!
 - ▲ 小さい発問が多すぎる⇒先生についていく授業になっていく。
 - ▲ 問と答え 先生と個人の1対1になっている。
 - ▲ 教師がつながようとしないと子どもはつながらない。
- ☆ 授業で考え(探究)させる課題(教師側からの発問)は ⇒ 2~3問にする。

【授業②】 那覇市立金城小学校 Y先生 5年 国語
 単元名：人物の心情を想像して、物語の続きを書こう。 《物語》
 教材：「いつか、大切なところ」 (教育出版)
 本時の目標：揺れ動く亮太の心情を考える

[ビデオ視聴]

《授業デザイン》



1. 本時のめあてを確認する
2. 前回までの内容を教師の音読で確認する
3. 今日場面を音読する ⇒ グループで音読 ⇒ 指名読み (希望者)
4. 亮太の心情をグループや全体できき合う
5. 授業学んだことや感想をノートに書く

[授業者より]

金城小では、2年前から子ども一人ひとりの学びを保障しよう。これの一斉授業から脱却しようと「学びの共同体」の理念のもと全職員で取り組んできた。子ども達は4月初からペアやグループできき合う関係が自然にできており、2年間で「聴く」ということがどんなに大事だったか感じているところである。

[グループ協議]

写真①、ビデオ視聴後に語る授業提案者である。



写真①

「こんな感じでした。先生方のいろんな視点から学ばせてください。」2年前、初めてY先生の授業を参観させていただきました。若くてやる気満々「明るく元気に楽しく」を言葉と形にしたかなりテンションハイな教師だったことを覚えています。今日、私の目の前の参観者は「まだまだ声が大きい、テンションが高い」という感想を持たれた先生方がほとんどではなかったかと察します。しかし私は授業者に大きな拍手を送りたい。それは、2ヶ年前、去年よりだいぶ言葉が減り可能な限り「子ども達の声で」を意識した授業への転換が心がけられてきたことを感じたからです。



写真②

授業づくりには、授業者の思いやセンス、子ども達との関係が大きく影響し合って深まりや広がりのある学びが創られていくものです。それは、教師一人の思い上がったプランでは決してたどり着くことはできない境地なのです。「深い学び合い」は子ども達と、子ども達の声で探究していくプロセスの中に生まれるものなのです。写真②、授業者もグループ協議に参加し、謙虚に自分の授業についての話に心を傾ける。写真③、授業提案者のおかげで参加者がつながる。わたし達は常に授業提案者には感謝と「おかげさまで」の念を抱いて研究会に参加したい。



写真③

《石井先生より》

- ▲ 「分からなさ」はたからもの。どうしたらいいかみんなで考えてあげる⇒自分は自分でみえない
- ▲ 「いい考え」だけをほめない ⇒ 正解追及になる ⇒ 弱い子が参加できなくなる。
 授業が反応する子どもだけで進行している。発言者と1対1になってしまう。⇒子どもへつなぐ。
 細かいところにイチイチ反応しない ⇒ 我慢。しんどい。
- ▲ 教師がしゃべっているとき、教師は聴いていないことになる。

[グループにおける対話について]

- ⇒ グループを磨く (最初の方法をもつ) 学び合いになっているか常に観る
- ⇒ 分かる子が優先されている。ほとんどが話し合いになっている。「分からない」をテーマにする。
 「わかっている」ことの交流は言い合いに傾斜しやすく、発言力のある子にまとめられてしまう。
- ☆ 子どもの言葉から教師が学ぶ ⇒ 子どもの理を聴く ⇒ 仲間につなぐ
- ☆ 教師は早くわからせるのが役割ではない、探究に向かわせるファシリテータの役割を担う。
- ☆ 物語におけるグループテーマは2つで十分である。課題(テーマ)は教師の教材研究の深さ。
 探究や対話のテーマはこのクラスを知る授業者が一番わかるはずである。
 ▲ ただ見つけるだけの課題は ⇒ × だから…思考を要するテーマ。考えるが必然のテーマ。
 答えが特定されないテーマ(多様性を導くテーマ)。皆で考えるに価値あるテーマ。

[音読について]

- ☆ 仲間に聴いてもらう音読をさせる。意図的にゆっくり読ませる。
- ▲ 1文読みは、ちゃんと読んでいるだけ ⇒ 学んでいない ⇒ 味わう読みへ転換

[コの字の学習形態意義について]

- ▲ コの字にはしたが、教師対児童の1対1になっている⇒コの字の目的と意義の共有が必要
- ▲ 子ども同士の対話の時間が圧倒的に短い ⇒ ゆとりをもって、子どもを信じてあずけましょう。
- ☆ 互いの考えをすり合わせるために、教師は「つなぐ」ことに専念する。